

中華航空機墜落事故の遺族の松峯弘さん(69)＝大阪市東住吉区＝が、23歳で犠牲になった長女の幸子さんの遺志を継ぎ、政治に関す

る本を自費出版した。「娘の熱意を無にしたくなかった」。短くても、志の高かった人生の証しの一冊だ。(社会部・太田鉄弥)

中華機事故 犠牲女性の父

世直しの遺志 代理出版



松峯幸子さん

幸子さんは複数のアルバイトで学費をかきながら、大阪外国語大(現大阪大)の夜間の部でドイツ語を学んだ。役所でのバイトで公務員の意欲の低さを感じ「世直しせないかん」「国の基盤の政治こそが大事」と問題意識を持ったという。家具販売業で門外漢だった弘さんも、意見を交わすうちに政治に興味を持ち、新聞を切り抜いて勉強した。ひざをつき合わせ、理想論を戦わせることが、楽しみとなった。



幸子さんは本格的に政治を学ぶためドイツの大学に自費で留学。一九九四年に一時帰国のため、中華航空機に乗り合わせた。二十五時間も議論して、喪失感に暮

生前の幸子さんとやりとりした手紙を前に、遺志を継いで刊行した本を手にする松峯弘さん＝大阪市東住吉区で

れていた弘さんの目に飛び込んだのは、便せんの幸子さんの言葉。「世直しをあきらめていない」。がむしやらに働き、午前二時をすぎても机に向かって本を開く娘の姿が浮かんだ。「世直しの思いを継ごう」と決めた。

勉強姿に思いはせ

必要」と原型を考えていた。弘さんはインターネットを覚えて掲示板に載せ、市民や学生らによる助言や批判など数千回の書き込みを法律論を鍛えられながら、本をまとめた。事故から十六年がたとうとしている。「幸子なら、もっと早く書けたよね。ごめん」。霊前で静かにわびた。

中華航空機墜落事故
一九九四年四月二十六日、台北発の中華航空機(エアバスA300-600R型)が、名古屋空港への着陸直前に墜落、264人が死亡した。運輸省(当時)の航空事故調査委員会は乗員側の自動操縦装置の理解不足や、機体の問題などが「連鎖・複合」して起きたと報告した。



A5判百二十五ページ、九百九十八円。フイツーソリューション発行。書店で申し込む。